地元住民のご理解とご協力のもと、工事を着実に進めていく。

住環境への影響に配慮 地元住民との対話を重ねる

高速道路を造る上で最も大事なのは、沿線の地元住民との対話である。第二京阪道路は人口密度の高い門真市や新興住宅地が広がる枚方市の市街地を通るため、工事中は建設資材を載せたダンプカーやブルドーザーなどの大型車両が住宅街の近くを通ったり、民家から約10メートルしか離れていないところに橋脚の土台となる基礎杭が打たれたりする。

「地元の方が一番気にされるのは、工事中の騒音・振動といった住環境への影響なんです。工事ですから、騒音・振動が起こるのは仕方がないことですが、だからこそ、地元の方と協議を重ねて、ご理解いただけるまで何度でもご説明する必要があるんです」と舗装・遮音壁設置工事の指揮を執る岡田は力説する。

NEXCO西日本では、工事に入る前はもちろん、工事中も随時、地元住民に対する説明会を開催している。岡田は、遮音壁の工事を3月から始めるに当たって、1月末以降の毎週末、土日のどちらかを使って、毎回2時間ほどの説明会を実施している。出席者は毎回約20〜30名で、一つひとつの自治会に対し数回の説明会を開くため、その数は膨大なものになる。

説明会では、地元住民からどういった質問が出るのか。

「土工工事であれば、どんな工事をするのかといったことや、何時まで作業をするのかといったこともありますが、やはり騒音・振動に対するご質問が多いです。交野地域では、地元の方からのご要望で土工工事着手時から継続して騒音計を設置しているほどです」とその関心の高さに驚かされる。

「遮音壁を設置するときには、ボルトを締める工具として音の出るインパクトレンチは使用せず、音の出ないシャーランナーやドライバーレンチを使用します。これも、説明会のときにサンプルを持参して、納得いただけるまでご説明しています」。

西日本高速道路（株）
関西支社 枚方工事事務所
岡田 浩一

クレーンで部材を吊り上げ高さ8メートルの遮音壁を設置

きめ細やかな地元対応、活発なコミュニケーションを展開

事業の実施にあたって沿線地域に対してはきめ細やかな地元対応をしている。

「このあたりはいわゆるベッドタウンと呼ばれる地区が多く、夜8時ぐらいになるとかなり静かになります。そのため、地元の方と『確認書』を結んで、工事は午前8時〜午後6時（実際の作業は午後5時）までと申し合わせをしています」。

「確認書」には、祝祭日に工事をしないことや、付近を通るダンプカーの台数制限など、こと細かい取り決めが書かれており、関係各機関はそこに書かれていることを厳守することに努めている。また、地元住民とのコミュニケーション手段は多岐にわたり、地元の掲示板に工事や規制に関する週間予定を事前広報したり、地区によって違いはあるものの、月1回程度、地元の町会に参加して、進捗状況の報告や今後の予定を説明している。

さらに、「何かあったときはどこに連絡したらいいのか」という地元の方の声に配慮し、各地域を代表する施工業者を窓口とした連絡体制を整備。仮に工区の違う案件であっても、連絡を受けた施工業者が窓口となってご要望を受け付けることで、地元の方の声が迅速、かつ確実に届くようにしている。

写真などを多用し分かりやすさに配慮した現地説明会

第二京阪道路

第二京阪道路は、一般国道1号のバイパスとして京都と大阪を結ぶ6車線の自動車専用道路と2〜4車線の一般道路で構成される延長28.3キロの道路です。国土交通省とNEXCO西日本が共同で事業を推進。供用開始により、国道1号および周辺道路の慢性的な渋滞は解消され、京都・大阪間を約1時間で移動することが可能になります。また、名神高速道路と並行する高規格道路として、京滋バイパス、近畿自動車道などと一体となったネットワーク網を形成することで、交通の分散とその円滑化に貢献します。また、ダブルルート化で大規模災害発生時における早期の交通確保や老朽化する路線の抜本的な補修も可能にすることが期待されます。なお、当路線は2010年3月の開通を目指しています。

現場で進む相互理解、より親しみやすく開かれた現場へ

公共工事は、地元住民の理解と協力がなければ工事を進めることができないため、十二分に説明を尽くすことが求められる。ところが、建設や土木の専門用語は分かりにくいものばかり。この点について岡田は、分かりやすい資料作りと説明を心がけているという。

「見て分かりやすい図や写真を多用し、専門用語はできるだけ使わずに資料を作成しています。説明するときは、市道○△×号線といっても分かりにくいので、あそこのコンビニの前の道路です、と言い換えたり、遮音壁は『防音壁』と一般的な言葉に変えたりして伝えています。そして何といっても本音でぶつかっていくことが必要ですね」と語る。

そうした、分かりやすさに対する工夫とともに、親しみやすく開かれた現場を目指して年1、2回は現場見学会を実施している。2009年5月、舗装や施設といった仕上げ段階としては初めての現場見学会を橋梁工事、土木工事と共同で行い、約500名の参加があった。

「工事中の高速道路を歩く機会はほとんどないでしょうから、多くの方からは『こんなに道路の幅って広いんだ』という率直な感想をいただきます。親子連れで参加する方も多く、好奇心溢れる小学生のお子さんが、高さ8メートルの遮音壁に興味を持ち、社員の説明に聞き入っていました」。

NEXCO西日本の事業に対する地元住民の理解は進んでいると実感しているか、と岡田に問い掛けた。

「そうですね。作業員の方も疲れて大変でしょうとか、工事中の事故だけは気をつけてくださいね、と工事関係者のことを気遣ってくださる住民の方が本当に多いんです。少しずつですが、ご理解はいただけているのかなと思います」とにこやかに話してくれた。

親子連れなど多くの方が参加する現場見学会